

謹賀新年



新年の挨拶

YRPP 研究開発推進協会代表幹事
独立行政法人通信総合研究所横須賀無線通信研究
センター長

若菜 弘 充

謹んで新年のお慶びを申し上げます。

昨年4月に独立行政法人通信総合研究所横須賀無線通信研究センターのセンター長として赴任し、YRPP 研究開発推進協会代表幹事を務めさせていただきます。昨年は同協会の活動に格別のご理解とご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

昨年よりYRPPの第2期5カ年ビジョンがスタートし、協定書(MOU)締結による国際連携の推進、各種セミナーやシンポジウムの開催を始めとして様々な取り組みをしてきました。今年はさらに新しい研究領域への拡大や研究交流の充実などビジョンの実現化に向けて努力していきたいと思っております。

通信総合研究所においても、平成14年度より、新世代モバイル研究開発プロジェクトとUMB(Ultra Wide Band)研究開発プロジェクトの2つのプロジェクトを開始いたしました。YRPP 研究開発推進協会において共同研究課題の提案を行い、複数の機関との共同研究もスター

トしました。さらにテストベッド構築などに関して共同研究の輪を広げていきたいと思っております。横須賀無線通信研究センターでは国際連携を大切に考えてきました。今後さらにアジア地域との連携を深めていきたいと考えています。その一環としてシンガポールのサイエンスパークに通信総合研究所無線通信ラボラトリーを開設し、高度道路交通システム(ITS)や新世代モバイルに関する無線通信技術の研究開発を行っています。また中国との連携として北京郵電大学を始めとして共同研究を広げていき、新世代モバイルのテストベッドを中国国内に建設して共同研究を行おうと計画しています。このような活動がYRPPにおける国際連携に役立つことを期待しています。

昨年はYRPP 研究開発推進協会の活動の一環として、中国惠州 TCL 移动通信有限公司へ視察に行きました。TCLは中国の移动通信市場では後発ですが、現在中国国内でノキア、モトローラについて第3位の売り上げを誇る急成長企業です。社長は世界の優秀人材に選ばれたほどの若い指導者です。説明に現れた乗務副総経理も米国サンディエゴから中国に戻ってきた若く活動的な人物で、成功の理由を、「快吃慢」(速いものが遅いものを飲み込む)時代と看過して戦略を立て実行してきたからだと言っていました。スピード化をどのようにして図るかが、我が横須賀無線通信センターも含めたYRPPにとっての今年の課題の一つだと思っています。本年もよろしく願いいたします。



謹・賀・新・年



新年のご挨拶

総務省 大臣官房技術総括審議官 石原 秀 昭

平成15年の新しい年を迎え、謹んで新春のご挨拶を申し上げます。皆様方には日頃より情報通信行政に多大なるご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、依然として厳しい経済状況にある我が国再生のためには、世界最先端のIT国家となる必要があるため、「e-Japan 重点計画-2002」等に基づき、IT政策を重点的かつ戦略的に推進しているところです。「e-Japan 戦略」では、超高速アクセスが可能なインターネット網の整備が目標の一つに掲げられておりましたが、既にその目標を超えたアクセス環境が整ってきたことから、今後は利用を高めていくための促進施策が重要になると考えられています。総務省においても、世界最高水準のネットワークインフラの整備とともにその利用促進に向けて、戦略的な研究開発を推進しております。その中でも、あらゆる情報機器が広帯域ネットワークで結ばれ、誰もがいつでもどこでも情報をやり取り

できるユビキタスネットワークの早期実現を目指して、ユビキタスネットワーク技術の研究開発・標準化を推進してまいります。

横須賀リサーチパークは、モバイル情報通信研究開発の拠点として1997年秋にオープンして以来5年間に渡り、多くの研究機関の集積を背景に産学官連携による共同研究、国際会議および海外研究機関との交流等を実施し、国内外から大きな評価を得て参りました。これもひとえに関係者の皆様方のご尽力のたまものと、深く敬意を表する次第です。今後も先導的な役割を担うことにより、優れた研究成果を創出されますことを期待致しております。

最後に、総務省として、高度情報通信ネットワーク社会の実現に向けて努めてまいりますので、皆様方の一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。新年のご挨拶とさせていただきます。



新春のあいさつ

横須賀市長 沢田 秀 男

新年あけましておめでとうございます。

皆様には、お元気で新年を迎えられましたことをお喜び申し上げます。

世界経済の行方は、アメリカ経済の減速に伴い不透明感を増し、国内的には、デフレが長期化する中で、景気回復と財政再建という難題に直面しています。

こうした中で、本市では、新しい年においても、行財政改革をさらに推進しながら、「生活者重視」の立場で諸課題に果敢に挑戦していく所存であります。

本市はいま、『挑戦する自治体』として全国的に注目されています。都市経営の革新的ランナーとしての自負を持ち、『変革の勇気』

と『創造の知恵』を発揮して、市民協働のまちづくりに全力を尽くしてまいります。

情報通信技術の世界的な研究開発の拠点であるYRPは、国際的にも高い評価を得ており、多くの国外のサイエンスパークとの提携が進められています。今後は、横須賀市の「横須賀市産学官交流センター」に入居している8大学との産学官の連携が図られ、一層優れた研究開発成果が創出されることを期待しております。

本年が皆様にとり輝かしい年となりますようお祈り申し上げますとともに、皆様の格別のご協力をお願い申し上げます。新年のあいさつといたします。

研究施設拡大から見える 将来展望

平成 14 年度に研究施設棟の拡大を行った企業代表より、
Y R P での研究将来図を語る



(株)NTTドコモ
代表取締役社長
立川 敬二

新年あけましておめでとうございます。謹んで新春のご挨拶を申し上げます。

私共、NTTドコモは1998年にYRPにR&Dセンターを開設し、2002年には、さらに2号館を完成させて施設の充実を図ってまいりました。YRPに移転してから現在に至る間に、2001年10月にW-CDMA方式による第3世代の移動通信サービス(FOMA)を世界に先駆けて実用化するなどの成果を残してきております。そのFOMAの開発においては、YRP地区でIMT-2000関連実験局運用調整分科会を通じて、多くの関連機関の皆様とともに精力的にフィールド試験を行い、数多くの試験項目をYRP地区で実施してまいりました。これらのYRP地区での総力を結集したR&D活動無く

してFOMAのサービス開始が成し得なかったことは紛れもない事実でありましょう。

また、現在は3.5世代や第4世代を中心とした研究に取り組んでおりますが、昨年の5周年記念行事として創設されたYRPアワードをはじめとしたYRP地区での数々の施策は、新たな技術開発に取り組む研究者への意識の高揚に大きく役立つものであります。

今後の第4世代以降の移動通信の研究開発についても、これまで同様にYRP地区を中心とした研究活動を推進して、新技術をYRPから世界に向けて発信していきたいと考えております。



日本電気(株)
代表取締役社長
西垣 浩司

この度、NECは昨年秋に完成致しました「YRP技術センター」へ移動体通信分野の研究開発拠点として携帯端末開発部門とネットワークインフラのソフト開発部門を移転させ、研究開発のブレークスルーを目指して業務を開始致しました。

携帯端末開発部門はコアテクノロジー開発本部が入居、端末関係の先端的要素技術、特にWCDMA端末実現の鍵となる無線部、信号処理部、プロトコル処理までの一貫した開発と、更にこれらを含めた端末のLSI開発を行い、YRPメンバー様と切磋琢磨して技術開発に努め、WCDMAの性能を最大限に引き出して一日も早くFOMA端末が日本の標準端末と成りうるよう努力してまいります。

ネットワークインフラのソフト開発部門はネットワークソリューション事業部が入居、従来にも増したNTTドコモ殿との研究開発の連携、またYRPメンバー様との協業連携を図り3G携帯電話インフラシステム、モバイルマルチメディア、オペレーションシステムの開発、評価、インプリメンテーションを行うと共に、4G携帯電話以降のインフラシステム等の研究開発に向けた取り組みも行ってまいります。

今後は最先端技術のメッカとして多くの研究機関が集うYRPのメンバーの一員として、このすばらしい研究環境の中でさらなる研究開発に邁進してゆく所存でございます。今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。



富士通(株)社長
秋草 直之

新年明けましておめでとうございます。謹んで、新春のお慶びを申し上げます。

昨年は、IT業界にとってはまことに厳しい1年でしたが、YRPは、昨年11月には、5周年を迎え、ますます活況を呈しているように思います。移動通信は、これからのユビキタス・ネットワーク時代のキーテクノロジーであり、YRPへの期待は高まるばかりです。当社のYRP研究センターも当初100人規模でしたが、年々規模を拡大し、昨年5月の5番館の完成を機に、移動通信開発部隊を結集し、約1000名の研究開発センターにすることができました。あらためて、関係者の皆様に感謝を申し上げます。

YRPには、各大学・移動通信関連企業・研究機

関などが展開し、ヨーロッパ・アジアなどの研究機関とも密接な交流があります。多種多様なアライアンスが容易な場であるとともに、技術者相互の切磋琢磨の場でもあり、素晴らしい開発環境だと考えています。私は、昨年の明るい話題の一つであったノーベル賞の二人同時受賞にあるように、日本の技術は本当に素晴らしいと思っています。特に移動通信は夢のある技術です。当社は、会員の皆様と共に、必ずYRPを21世紀移動通信の世界を牽引する拠点にするのだという夢と気概を持って鋭意開発に取り組んでいきたいと考えております。

最後に、本年が皆様の発展の年となることを祈念するとともに、YRPのさらなる発展を願い、新年の挨拶とさせていただきます。

つながる未来の

「ユビキタスコンピューティング」
環境実現を目指して！

YRPユビキタス・ネットワーク研究所の活動状況

YRPユビキタス・ネットワーク研究所

副所長 越塚 登

YRPユビキタス・ネットワーク研究所は、我が国におけるユビキタスコンピューティングの中核研究機関として、通信・放送機構（TAO）の支援を受け、平成14年1月に設立された。ユビキタスコンピューティングとは本研究所の所長を務める坂村健・東京大学教授が1980年代より世界に先駆けてその概念を提唱し、世界的にリードしてきた分野である。

多くの方にとって「ユビキタス」は普段聞き慣れない言葉であろう。

「ubiquitous」と綴り、ラテン語を語源とする宗教的色彩のある単語で、日本語に直すと「どこにでもある」、また漢語的に言うと「遍在する」という意味の形容詞である。

これに、「コンピューティング」や「ネットワーク」という名詞をつけることで、いつでもどこでも通信サービスやコンピュータによる情報サービス、機器制御によるサービスを受けられる情報通信環境を表す。1990年代を席卷したパーソナルコンピュータとインターネットが、21世紀に入り翳りが見え始めている中で、「ユビキタス」はポス



YRPユビキタス・ネットワーク研究所 所長
坂村 健 東京大学教授



ために...

ト PC・ポストインターネット時代の IT の新しいパラダイムとして、産業界、学術分野双方から強く期待されている。

YRP ユビキタス・ネットワーク研究所では、この「ユビキタス」の実現に必要な広範な基盤技術の研究に取り組んでいる。研究内容は、第一に、あらゆる場所に埋め込むための、まさに「ユビキタス」なコンピュータノードを実現する、基盤プラットフォームシステムである。第二には、人間に提供するユビキタスコンピューティングサービスを後で支えるサーバ技術の研究である。さらに、これらのサーバと末端のノードの間を結ぶ通信規約である「ユビキタスネットワークングプロトコル」の研究である。また、「ユビキタス」技術ではシステムの安全性が極めて重要となるため、特にセキュアコンピューティングの研究に力を注いでいる。また、利用者層は幅広いため、エフォートレスな利用環境を実現するヒューマンインタフェース研究も重視している。研究分野は、基礎的な分野から製品レベルに近い実用的な分野にもわたる。

また、基盤を支える要素技術からアプリケーション技術に及ぶまで、広いレンジで総合的、包括的に研究を進めている。特に「ユビキタス」のような先端の IT 分野では、基礎研究の成果が製品化される時間間隔が短い。しかも、あらゆるところに IT を適用する分野であるため、これらのことすべてを「トータル」に進めて、成果を出していくことが、本分野で成功を収める鍵であると我々は考えている。

本研究所の今後の研究成果にご期待いただければ幸いである。



【概念図】



【eTRONカードを使用した研究の一例】



Y R P オープン 5周年記念事業開催

オープン5周年を迎えたYRPでは、本年を更なるステップアップの年と位置付け、研究者間の交流や研究開発の推進をはかるため、また一般市民の方の情報通信技術への理解を深めることも目的として「YRP 5周年記念事業」を、11月1日～2日に開催した。2日間で延べ約6300人の来場者があった。YRPでは、今後はモバイル研究開発の一層の推進はもとより、新たに高速インターネットと放送分野における研究開発との連携強化を図り、YRPの研究アクティビティを更に向上させ、研究機関・研究者にとってより豊かな環境構築を目指す。

初日の記念式典では、麩 昭男YRP5

周年記念事業実行委員会会長の挨拶に引き続き、ご来賓の石原秀昭総務省大臣官房技術総括審議官、並びに立川敬二(株)NTTドコモ代表取締役社長よりご祝辞をいただいた。

また、地元横須賀出身の小泉純一郎氏からもYRPへの更なる期待を込めたメッセージが寄せられた。

YRPアワードの創設

このアワードは、YRPが関連する国際会議やイベントにて発表された研究論文を対象としたものであり、今後も毎年継続して表彰を行う。

YRP賞：特に優秀で、将来性があると認められた個人又は団体

YRP奨励賞：論文発表時35歳以下の若手研究者

本年度の受賞者は別表のとおりである。

記念式典に引き続き行われた表彰式では、YRPアワード委員会会長の安田靖彦氏(早稲田大学教授)より講評が行われた後、受賞者にはYRP研究開発推進協会の羽鳥光俊名誉会長より、激励の言葉とともに賞状並びに副賞が手渡された。



YRPアワード授与式

YRPアワード

【YRP賞】

『High-speed MC-CDMA Broadband Packet Wireless Access in Forward Link with Multi-level Modulation and Hybrid ARQ』(2000.11 WPMC2000)
新 博行氏/(株)NTTドコモ ワイヤレス研究所
安部田 貞行氏/(株)NTTドコモ ワイヤレス研究所
佐和橋 衛氏/(株)NTTドコモ ワイヤレス研究所

『Software Defined Radio Prototypes for Multimode Operation』(2000.11 WPMC2000)

上原 一浩氏/(株)NTT未来ねっと研究所
鈴木 康夫氏/(株)NTTアクセスサービスシステム研究所
中津川 征士氏/(株)NTT
久保田 周治氏/(株)NTT先端技術総合研究所

『Downloadable Multi-mode and Multi-service Software Radio Communication System for Future Intelligent Transport Systems』(2000.11 WPMC2000)

原田 博司氏/独立行政法人通信総合研究所 横須賀無線通信研究センター
藤瀬 雅行氏/独立行政法人通信総合研究所 横須賀無線通信研究センター

【YRP奨励賞】

『A Study on Level Detection Scheme for Broadband Mobile Communication Systems』(1998.11 WPMC1998)

平 明德氏/三菱電機(株) 情報技術総合研究所

『A Proposal of Mobile Community Communication System』(2000.11 WPMC2000)

太田 賢氏/(株)NTTドコモ マルチメディア研究所

『Simple Propagation Models for ITS Inter-Vehicle Communications at 60GHz』(2001.11 ITST2001)

山本 温氏/松下電器産業(株)デバイス開発センター

『Proposal of 1394 Wireless Home Network using Millimeter-Wave Technologies』(2000.11 WPMC2000)

松田 淳一氏/日本電気(株)ネットワークング研究所

【YRP特別賞】

『ミリ波映像多重伝送システムに関する共同研究』
(2000.3, 2001.3 TSMW 他)

YRP共同研究グループ

独立行政法人通信総合研究所代表	小川 博世氏
NTTアドバンステクノロジー(株)代表	明山 哲氏
沖電気工業(株)代表	徳田 清仁氏
シャープ(株)代表	佐藤 浩哉氏
三洋電機(株)代表	岩崎 利哉氏
日本無線(株)代表	木澤 隆雄氏
(株)日立国際電気代表	下道 洋一氏
富士通量子デバイス(株)代表	平地 康剛氏
キヤノン(株)代表	土田 真二氏

記念講演

倪 健中 氏（中国移動通信連合会副会長）
中国移動通信連合会名誉会長の桂 世鏞
氏からのご祝辞の披露に続き、『中国移動
体通信の近況』についての講演が行われた。

坂村 健 氏（東京大学教授）

『ユビキタスコンピューター革命』につ
いて、講演が行なわれた。



倪 健中 副会長



坂村 健 教授

企業PR展示会

企業PR展示会

2日間に渡り、YRPにおける今日まで
の研究成果や今後期待されるテーマ等につ
いての展示が行なわれた。YRPセンター
1番館において30ブースの展示が行なわれ、
NTTドコモ及び富士通においても展示が
行なわれた。

日頃触れることのない最先端技術を目の
当たりにした一般の方からは、驚きと感動



フリーマーケット

の声があがっていた。

また、2日（土）にはYRPセンター1
番館周辺を中心に、フリーマーケットや子
供向けアトラクション等の市民向けイベン
トが開催された。同日は隣接するNTT横
須賀研究開発センタにおいて「電腦フェスティ
バル2002」が開催され、日頃静かな研
究都市も、この日ばかりは近隣地域とのコミュ
ニケーションの輪が一時に花開くような賑
わいを見せていた。

YRPオープン5周年記念「通信・放送技術開発シンポジウム」開催

「通信・放送技術開発シンポジウム」はY
RP 5周年記念事業の一環として、モバイル
情報通信技術開発のCOEとしてのYRP
を広く紹介するとともに、現在に至るモ
バイル通信の発展過程とそのトレンドを検
証し、今後のYRPおよびモバイル技術と
広い分野の先端技術を統合した情報通信の
発展方向を示唆することを目的として12
月9日（月）東京にて開催された。

羽鳥光俊YRP研究開発推進協会名誉会
長から主催者挨拶が行われた後、基調講演
では、（株）NTTドコモ代表取締役社長 立
川敬二氏より「移動通信が切り開くマルチ
メディア社会」と題し、今後の新たな技術
開発と通信と放送の融合の進化は潜在す
るモバイル通信の膨大な需要を顕在化させ
ることが重要であるとの講演をいただき、
総務省 総務審議官 月尾嘉男氏は「IT
革命とフロンティアの開拓」と題し、過去
の文明が限界に至った様々な事象に照らして、
情報（IT）革命のなすべき変革の方向に
ついて指摘された。

基調講演に続いて、「ブロードバンド時代
における課題と今後の取り組みについて
今後のYRPの役割とは」と題してパネ
ルディスカッションが行われた。



パネルディスカッション
（左から）櫻会長、石原氏、飯田氏



（左から）橋本氏、石田氏、平田氏、川田氏

パネラーから、ユビキタス時代を展望しつ
つ進められる今後の通信と放送の融合実現
に向けた研究開発では、広範な分野にまた
がり多くのリスクを伴う困難な技術課題が
山積しており、それは単独の企業がなし得
る研究ではなく、産学官連携または国際的
にも連携して推進すべきとの方向性が示され、
その意味においてYRPへ高い期待が表明
された。コーディネーターの鶴 昭男YRP
研究開発推進協会会長はその事を纏め、
推進協会として今後のYRPの更なる発展
への貢献を表明してシンポジウムを終了した。



主催者挨拶

YRP研究開発推進協会
名誉会長 羽鳥光俊

基調講演

（株）NTTドコモ
代表取締役社長 立川敬二 氏
総務省
総務審議官 月尾嘉男 氏

パネラー

総務省
大臣官房技術総括審議官 石原秀昭 氏
独立行政法人通信総合研究所
理事長 飯田尚志 氏
日本放送協会
理事 橋本元一 氏
NTTコミュニケーションズ（株）
代表取締役副社長 石田 守 氏
KDDI（株）
取締役執行役員専務 平田康夫 氏
松下電器産業（株）
代表取締役副社長 川田隆資 氏
YRP研究開発推進協会
会長 鶴 昭男（コーディネーター）

新世代モバイル及び UWB 共同研究スタート

通信総合研究所横須賀無線通信研究センター 若菜 弘 充

独立行政法人通信総合研究所横須賀無線通信研究センターは、平成14年度から開始した新世代モバイル研究開発プロジェクトとUWB (Ultra Wide Band) 研究開発プロジェクトの2つのプロジェクトに関して、昨年8月28日 YRP ホールで YRP 研究開発推進協会会員に対して共同研究課題の提案を行い、共同研究をスタートさせた。(新世代モバイルについては、今年具体化)

新世代モバイル研究開発プロジェクトは多種多様な無線通信サービスを利用者が意識することなく柔軟に選択し、安全かつ安心して利用するための技術の確立を目指すものである。プロジェクト統括リーダーに安達文幸東北大学教授を招き、3つの研究グループを発足させた。横須賀リサーチパーク内に実験用施設(テストベッド)を構築し、産学官の共同研究のもとで開発した技術の実証実験を行う。昨年の共同研究課題は無線セキュリティー関連技術に関するものであったが、今年はさらに共同研究課題を増やしたいと考えている。

UWB 研究開発プロジェクトは、テストベッドを用いたマイクロ波帯システム(960 MHz, 3.1 - 10.6 GHz, 22-29 GHz)の実験による検証実証、準ミリ波からミリ波帯の未利用周波数帯におけるデバイスからシステムまでの一体的な研究開発を行うものである。プロジェクトリーダーに河野隆二横浜国立大学教授を招き、UWB 結集型特別グループを発足させた。共同研究では、マイクロ波とミリ波の技術開発を行う2つのグループに分け、さらにそれぞれのグループ中で技術課題を分担して研究開発を進めている。

2つのプロジェクトの研究内容は、12月6日(金)にYRPホールで開催された通信総合研究所第103回研究発表会で発表された。内容は通信総合研究所のホームページからも知ることができる。

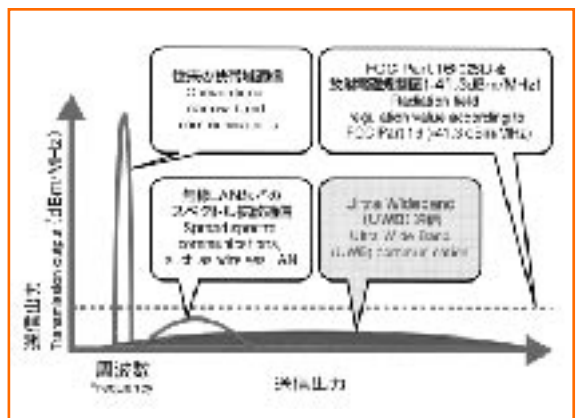
<http://www2.cri.go.jp/kk/e414/103kenpatsu/index.html>



共同研究説明会



新世代モバイルシステムのイメージ



UWB と従来の周波数スペクトル



WPMC '02 (米国ハワイ) 開催

第5回国際移動通信シンポジウム(WPMC '02 = International Symposium on Wireless Personal Multimedia Communications)が、独立行政法人通信総合研究所とYRP研究開発推進協会の共催により、アメリカ・ハワイ州ホノルル市において、10月27日(日)~30日(水)の日程で開催された。世界各地から約400名の研究者が集まり、盛況な会合となった。初日のチュートリアルセッションに続いて、28日にはオープニングセレモニーが行われ、WPMC'02実行委員長のジョージア工科大学ゴードン・ステューバ教授により開会の辞が述べられたのち、通信総合研究所の飯田尚志理事長、YRP研究開発推進協会の羽鳥光俊名誉会長がそれぞれ挨拶のスピーチをされた。引き続いてアメリカ・ルーセントテクノロジー社のChief Technology Officerのポール・マンキウィッチ氏による基調講演「Leading Technologies for Mobility」が行われた。

基調講演は29日、30日にも行われ、29日は横浜国立大学の河野隆二教授が「Anticipation of SDR and UWB」の演題で、また30日にはアメリカ連邦通信委員会(FCC)のビル・レーン氏が「Directions in Wireless Regulation」の演題でそれぞれ講演を行った。今回のWPMC'02の論文投稿総数は460件。そのうち採択された277件の論文が期間中テクニカルセッションにおいて発表され、中でも秀逸とされた6件の論文が29日夜に行われたアワードバンケットで表彰された。

同バンケットでは、2003年10月19日から22日まで開催されるWPMC'03の開催地である横須賀市の蒲谷亮一助役によるスピーチが行われ、また2004年春に中国にて開催予定のWPMC '04 Extra Eventについて、日・中移動体通信技術フォーラムの顧問である中国移動通信連合会(CMCA)の倪副会長から紹介があった。



スピーチを行う
YRP研究開発推進協会の
羽鳥光俊名誉会長



通信総合研究所の飯田尚志理事長



横須賀市の蒲谷亮一助役



WPMC '03 開催予告

本年の第6回国際移動通信シンポジウム(WPMC '03)は、発祥の地である横須賀市にて開催される。日程は2003年10月19日(日)~22日(水)論文投稿など詳細についてはWEBを参照。

WPMC '03 Website: <http://www.ilcc.com/WPMC/>

イギリス Mobile VCE との MOU 締結

平成 14 年 11 月 18 日、YRP 研究開発推進協会および(株)横須賀テレコムリサーチパークは、TV 会議を通じて、イギリスの Mobile VCE と研究交流についての覚書(MOU = Memorandum of Understanding)を締結した。

Mobile VCE (The Virtual Centre of Excellence in Mobile and Personal Communications Limited) は、1996 年に設立された非営利企業。移動体通信関連

企業や同分野の研究に実績のある英国有数の大学等、計 35 団体あまりの会員が産学連携による革新的な研究開発事業に取り組んでおり、その研究実績は、移動体情報通信事業の拡大推進を目指した、企業主導による商業的価値の高いものとして世界でも高い評価を得ている。

この MOU の調印により、今後、両団体は、情報交換、人材交流、共同研究の推進、開発技術のマーケティング、イベント等



調印式 (TV 会議にて)
右から 羽鳥名誉会長、農会長、在日英国大使館 フェロー書記官

の共同開催、広報活動、企業マッチング・紹介などの各項目について相互に協力していく構えである。

第 3 回 APT 研修実施

第 3 回アジア太平洋電気通信共同体 (APT) 次世代移動体通信技術研修が平成 14 年 11 月 13 日から 20 日まで YRP において実施された。この研修は APT の参加団体である YRP 研究開発推進協会が APT への貢献事業のひとつとして実施しているもので、今回は APT 加盟国のうち 13 カ国から 13 名の研修生が参加した。研修生はいずれも各国の電気通信主管庁における移動体通信担当管理者やキャリア及びメーカー

の技術者。研修では、YRP に関係の深い大学教授および YRP 進出機関研究者によって、新世代モバイル、IMT2000、MMAC、Mobile IP、ITS、成層圏プラットフォーム等についての講義が行われるとともに、関連の研究・実験用施設の見学が実施された。また、総務省表敬訪問、各国研修生による自国の電気通信状況についての報告、横須賀市長表敬訪問、横須賀市による地域情報化についての講義、レセプション



開講式

を実施、また休日には、横須賀国際交流協会の協力のもと、半日のホームビジット及び横浜観光を実施し、研修生は移動通信の最先端技術と日本文化の両方を体験した。

デンマーク ビジネス交流 ミッション開催

平成 14 年 11 月 24 日から 12 月 1 日の 8 日間、JETRO の L L 事業として「デンマーク等北欧移動通信産業とのビジネス交流ミッション」が開催され、北欧 3 カ国の北コトランド (デンマーク) スコーネ (スウェーデン) オウル (フィンランド) を、在欧日本企業を含め 20 名が参加し、NOVI、IDEON、TECHNOPOLIS (OULU) の各サイエンスパーク並びに企業を訪問した。各サイエンスパークからその地区の IT

産業の現状を聞くと共に、現地企業との間で「個別ビジネスミーティング」を行い、日本側 9 社と現地企業 15 社が参加し、有意義な情報交換がなされた。

昨年のビジネス交流ミッションに引き続き 2 回目となったが、今回は北コトランドの他、Lund 大学を含む 170 の企業団体が集結する、スウェーデンで最初のサイエンスパーク (IDEON) を有するスコーネと NOKIA 等の開発拠点のあるオウルを訪問した。各リサーチパー



交流ミッション参加者

クとも「移動体通信」「IT」「バイオ」等、幅広い研究開発が産学官連携の下に活発に行われていた。

今年 3 月にはデンマークの企業が来日する予定である。

第3回ミリ波ワークショップ開催

平成14年10月8日(火)、YRPセンター1番館において昨年に引き続き第3回目のミリ波ワークショップが、電気学会ミリ波技術を用いたシステム高機能化とその展開調査専門委員会、Topical Symposium on Millimeter-Waves (TSMMW) 委員会主催のもとで開催された。ミリ波ワークショップはミリ波技術に特化した研究会である。協賛機関は、YRP 研究開発推進協会、独立行政法人通信総合研究所、IEEE MTT-S、電子情報通信学会マイクロ波研究専門委員会、IEEE MTT-S Japan Chapter である。

第3回目を迎えた今回のワークショップでは、8件の発表が行われた。講演内容は、Mike Marcus 氏 (FCC) による、海外のミリ波利用動向の発表を皮切りに、通信総合研究所横須賀無線通信研究センターで研究開発が行われている縦系配線システム、広帯域ミリ波無線アクセスシステムおよび、ミリ波アドホックシステムの

紹介等が行われた。参加者は150名で、最新のミリ波モジュールやシステム開発状況を熱心に聞き入っていた。

また、発表の中で紹介された3点のシステムについては、本ワークショップに併設して展示が行われた。縦系配線システムでは、集合住宅での縦方向伝送を模擬したデモ展示が行われた。また広帯域ミリ波無線アクセスシステムでは、基地局間で1Gbps伝送が可能な基地局装置とシミュレータの展示が行われた。ミリ波アドホックシステムでは、bluetoothプロトコルを用いた複数端末間的高速データ伝送の様子を示す展示が行われた。

次回ワークショップは、2003年10月に横須賀リサーチパークで開催される予定であり、今後の我が国のミリ波学会、産業界をリードしていくことが期待されている。

なお、2003年3月17-18日には、ミリ波ワークショップの国際版である、2003



Mike Marcus 氏 (FCC) の講演



ミリ波ワークショップ展示

Topical Symposium on Millimeter Waves がYRP1番館にて開催される予定である。

「第2回EMC講演会」開催

平成14年10月10日、YRP1番館YRPホールにおいて、YRP研究開発推進協会と独立行政法人通信総合研究所が主催して第2回EMC講演会が開催された。今回は「携帯電話端末の電波防護(規制)の動向」をテーマとして4人の講師を迎え、昨年12月の第1回講演会を上回る多くの参加者があった。

講演会では、東京都立大学大学院工学研究科教授 多氣昌生氏「携帯電話による電波の健康影響問題と防護指針の動向」、総務省総合通信基盤局電波部電波環境課生体電磁環境係長 伊藤博輝氏「我が国における電波防護(規制)への取り組みについて」、(株)NTTドコモワイヤレス研究所生体EMC研究室室長 上林真司氏「SAR測定法のARIB規格と国際動向」、独立行政法人通信総合研究所

無線通信部門電磁環境グループ主任研究員 渡辺聡一氏「SAR測定・校正法等に関する研究動向(CRLでの研究を中心に)」をテーマにそれぞれ発表が行われ、講演後は質疑応答が活発に行なわれた。

なお、EMC講演会は今後も定期的で開催される予定である。

(講演内容等を知りたい方は事務局までお問い合わせください。)



東京都立大学大学院 教授 多氣 昌生氏



EMC講演会

第3回 ITS 情報通信国際ワークショップ (ITST2002) の開催



独立行政法人 通信総合研究所及びYRP研究開発推進協会が主催する第3回ITS情報通信国際ワークショップ(ITST2002)が平成14年11月7日～8日に韓国ソウルにて開催された。韓国のETRI、KICSの協力による初の海外開催である。当日は、従来の招待・一般講演、ポスターセッション等に加え、日韓両企業による展示ブースの設置、現地企業の技術開発を見学できるテクニカルツアーの企画等、これまでより新たに数々の試みがなされ、いずれも好評を博していた。発表論文の中には、ITS情報通信を要素技術からではなく、事業形態を含むシステム全体の見地から扱うものが多く、本分野におけるインフラならびにサービスの拡充への深刻な要求がうかがわれた。次回はシンガポールにて開催予定である。



日韓両企業による展示

アンテナ・伝播に関する国際シンポジウム(ISAP i-02)開催

これまで夏季オリンピックイヤーに開催されていたアンテナ・伝播に関する国際シンポジウムISAP(International Symposium on Antennas & Propagation)が特別に、「ISAP i-02」として、平成14年11月26日(火)～28日(木)にYRPにて開催された。ISAP i-02では、16のテクニカルセッション、ポスターセッション、3箇所から選べるテクニカルツアー、2つのパネル討論、3件の招待講演からなり、多彩なプログラムで実施された。内容的にも、3セッションから構成された「アダプティブ&スマートアンテナ」の他、移動体通信のためのアンテナ・伝播、医療用アプリケーションとEMC等の多岐にわたる最新技術の講演が行われ、多くの参加者から高い評価を受けた。また、要素技術としてのアンテナを専門とする学会であることを象徴するイベントとして「アンテナの歴史」と題してまとめた貴重な資料がYRPホール前のモニターでシンポジウム開催中、常時展示され、好評を博した。次回のISAPは2004年に仙台にて開催される予定である。



招待講演



ポスターセッション



スタートラインに立ち準備をする選手たち

YRP
イベント
報告

2002年 YRP クリスマス会

毎年恒例となっているYRPクリスマス会が、12月13日(金)にYRP1番館ホールにて開催され、今年は「安室奈美恵」そっくりの「amro」が登場。迫力ある歌そしてダンスを披露し、YRPホールはコンサート会場さながらの、熱気に包まれた。



ライブ風景

また、企業対抗クイズ大会も行われ、10チームが参加。出場者を応援する人々の歓声が響く中、各出場チームは優勝目指し熱戦を繰り広げ見事に、NTTドコモ8チームが優勝。締めくくりはビンゴ大会が行われ、当選者は溢れる笑顔で商品を手にし、参加していた就業者、そして近隣の方々は、YRPホールにて和やかな時を過ごした。



企業対抗クイズ大会



2002 YRP 駅伝大会開催

平成14年11月30日(土)、恒例となった「2002 YRP 駅伝大会」が開催された。YRP就業者及び近隣地域の方々の参加による、精鋭揃いの16チームでの大会となった。開催当日は、快晴、そして、11月下旬とは思えぬ暖かさ。選手のみなさんは、心地良い風を一身に感じつつ、また、多くの声援を受けながらの快走。ゴールテープを切る瞬間は、どの選手の顔も、日頃の練習の成果を出し切ったという、満足感と爽快感で一杯の表情で、ゴールをされていた。ローズテリアでの懇親会では、お互いの健闘を称え、美酒に酔いしれつつ、また、次の大会へ向けての新たな闘志を燃やしていた。

【編集・発行】

YRP研究開発推進協会

〒239-0847 横須賀市光の丘3-4 TEL: 0468-47-5008 FAX: 0468-47-5010

(株)横須賀テレコムリサーチパーク

〒239-0847 横須賀市光の丘3-4 TEL: 0468-47-5000 FAX: 0468-47-5010